

【研究論文】

絵本『イルカの星』(葉 祥明)に見る智慧
—1990年代スピリチュアル絵本と現代—

A Consideration on the Wisdom of the Picture Book “Iruka no Hoshi” by YOH Shomei: A Modern Value of 1990s Spiritual Picture Book

馬見塚 昭久

MAMIZUKA Akihisa

常葉大学保育学部

要旨

日本における「精神世界」「スピリチュアル」ブームは、1970年代後半から顕著となり、徐々に形を変えて現代に続いている。その流れを受けて、これまでさまざまな書籍が刊行されてきたが、「精神世界」あるいは「スピリチュアル」を標榜する絵本は稀である。本稿では、「精神世界」ブームが大きな盛り上がりを見せていた1990年代のスピリチュアル絵本の代表として、葉祥明の絵本『イルカの星』を取り上げ、内容を分析するとともにテーマについて考察した。その結果、本作品は「智慧」を根本テーマとしており、四半世紀を経た現代でも十分、その存在価値を有していることが明らかとなった。

キーワード：イルカ、スピリチュアリティ、智慧

I はじめに

現代文明の危機が叫ばれて久しい。経済成長を至上目標として大量生産、大量消費、大量廃棄を続ける社会がやがて行き詰るであろうことは、ローマクラブが発表した「成長の限界」(1972)をはじめとして、1970年代頃からさまざまな形で盛んに論じられてきた。

また、時をほぼ同じくして、そうした物質文明に対する反発や危機意識から、大いなるものとの繋がりや自己の霊性・精神性の向上を追求しようとする運動が欧米を中心に広まった。「ニューエイジ」と呼ばれたこの現象は、東洋思想との親和性が高かったこともあってか日本の若い世代にも浸透し、「精神世界」「スピリチュアル」として発展した。その内容はあまりに広範で、一括りに定義することは困難であるが、宗教学者の島菌進は、これを更に広い概念で「新霊性運動 new spirituality movements (あるいは新霊性文化 new spirituality culture)」と呼称している。¹⁾

このムーブメントを一過性のものとして無視しようとする向きもあるようだが、文学、音楽、映画、絵画、食、健康など、様々な文化が影響を受けてきたことは確かである。²⁾

絵本の世界も例外ではなく、作者の意図はともあれ、少なからぬ作品にその影響が感じられる。^(注3)ただ、そのことについて作者が言及することは稀で、作品に描かれた象徴的な絵や言葉の断片から思想的な基盤を探るしかない。

ところが、自ら「スピリチュアル」であることを標榜している作家がいる。1973年に、『ぼくのべんちにしろいとり』（至光社）で絵本作家としてデビューして以来、お伽噺に出てくるような風景を鮮やかな色彩で描いてきた葉祥明である。メディアに取り上げられることも多く、華々しいイメージがある一方で、実は、思索家としての姿や作品の実像は意外に知られていない。「メルヘン画家」という世評によるものか、現実を直視しない甘い作家と見られることも多いようである。

だが、環境問題、戦争、死など、葉は現実世界にはびこる暗くて重たい問題にも早くから関心を寄せ、作品化している。「地球全体に向けて愛のメッセージを届けようと活動して」いるという葉であるが、⁴⁾「一番奥深いところにあるのが『スピリチュアリティ』（霊性）、この世において物事はいろいろな層をなしていますから、テーマに応じて、それを表現しているわけです。『平和』『環境』『癒し』『智慧』は重要ですけど、それもこれも究極は一つです。スピリチュアリティが根底にあるのです」^(注5)とまで語るほど、スピリチュアルへの思いは深い。

葉の代表的なスピリチュアル絵本は、1990年代に相次いで刊行された『イルカの星』（佼成出版社、1996.9）、『ひかりの世界』（佼成出版社、1997.5）、『宇宙からの声』（佼成出版社、1997.12）の3部作である。有限会社バード（葉祥明美術館）が運営する通信販売サイト YOH SHOMEI-NET SHOP.com の『イルカの星』商品説明には、「葉祥明スピリチュアル絵本としても人気の高い1冊です」とあり、同書の絵本原画展の案内文には、「壮大な世界を美しい青のグラデーションで表現した本作は、作家自身が『好きな絵本』として挙げる一冊です」と記されている。⁶⁾



画像1 [表紙]

さて、世相はいよいよ厳しさを増し、ウクライナやパレスチナでは目を覆いたくなるような惨状が続いている。いつ破局が訪れてもおかしくない、ぎりぎりの世界情勢であるにもかかわらず、いや、それだからこそ、と言うべきか、これを好機ととらえた国々は、自衛のためと称して更なる軍拡に狂奔している。もはや、人類は自ら生み出した文明をコントロールすることさえできなくなってしまったのであろうか。

新霊性運動の是非について、ここで論ずることはしないが、未来社会を付託された子どもたちに残すべき絵本について考えることは喫緊の要事である。本稿は、一世を風靡した1990年代スピリチュアル絵本の代表として『イルカの星』を取り上げ、どのような精神が描かれていたのかを明らかにしつつ、病める現代社会における存在意義について考えてみようとするものである。

II 作品の背景

まず、なぜ「イルカ」が本作品の題材として選ばれたのか、その背景を考えてみたい。

日本における近代的な水族館の第1号として神奈川県藤沢市に「江の島水族館」（現「新江ノ島水族館」の前身）が開館したのは1954年のことである。1957年には、その附属施設としてクジラ類の飼育展示をする「江の島マリンランド」がオープンし、イルカショーが始まった。「日本で初めてイルカの持つ能力をショーという形にアレンジして紹介することに成功し、開館当初から人気が高く連日たくさんのお客さまで」賑わったという。⁷⁾

その後、高度成長の勢いに乗って各地に同様の水族館が開館し、イルカの知性や人懐こさが多くの人々に知られるところとなった。

また、映像文化の影響も見逃せない。例えば、テレビアニメ『海のトリトン』（原作：手塚治虫、1972）やアメリカのテレビドラマ『わんぱくフリッパー』（放映：NBC テレビ、1966-1968）では、登場人物とイルカは意思疎通のできる良き友として描かれた。映画『イルカの日』（配給：日本ヘラルド映画、1974）、『グレートブルー』（配給：20世紀フォックス、1988）では、青い海の美しさとともにイルカの知性や人間との交流が描かれた。それらは作品の主題ではなかったが、視聴者がイルカに対し特別な感情を抱くきっかけになったであろうと考えられる。

やがて、コマーシャルイズムの影響もあってか、ドルフィンウォッチング（ホエールウォッチング）やドルフィンスイムが観光及びレジャーの一形態として定着した。現在に至るまで、イルカブームとも言える状態が続いているのは周知の通りである。

ところで、島薮進は、「二〇〇〇年代に入った日本で『スピリチュアリティ』の語を通して目立つようになった現象は、すでに一九七〇年代末から八〇年代初めに『ニューエイジ』や『精神世界』の語とともに広まる気配を見せ始めた」と述べている。⁸⁾つまり、日本における精神世界への関心は1970年代末に顕著となり、姿や名称を少しずつ変えて現在へと続いてきたのであるが、「ニューエイジ」を信奉する人々が依拠する西洋占星術によると、博愛主義に基づく新しい時代（ニューエイジ）は、激動の末にやって来るのだという。⁹⁾

いま、1990年代の主な出来事を振りかえってみると、

1990年 バブル経済が崩壊し、湾岸戦争が始まる。

1991年 雲仙普賢岳が噴火

1992年 PKO法が成立

1993年 冷夏によるコメ不足「平成の米騒動」

1995年 阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件

1997年 酒鬼薔薇聖斗事件

等が挙げられる。破壊と変革の多い激動の1990年代だったと言えよう。世紀末への不安感も重なり、人々が新時代の到来を待ち望んだのも無理はない。

この間、イルカの生態を知らせたり、海の環境問題を告発したりする児童書、あるいはイルカが登場する児童文学作品が多数刊行されている。因みに1970年から1999年までに刊行された絵本の中で、イ

ルカが登場するものを抽出してみよう。絵本に限定すると決して多くはないが、それでも下表（表1）の通り、十指に余る数が挙げられる。

（※国立国会図書館の「児童書」に限定し、タイトルに「イルカ」をキーワードとして検索をかけ、「童話」等の標記のあるものは除外し、明らかに絵本と思われるものを抽出した。その他、論者が所有しているもの等も含めてある。）

イルカの絵本（1970年から1999年まで）

1	『いるかのジャック』	白木/茂 文,美乃/育 画	金の星社	1974
2	『いるかのカーフ』	R・モリス 文/マモル・フナイ 絵/杉浦宏 訳	文化出版局	1977.7
3	『いるか』	広崎芳次 著/上条喬久 絵	フレーベル館	1979.2
4	『いるかのうみ』	ティツィアーノ・チベレッティ 作/ミシェル・サンパン 絵/安藤美紀夫 訳	佑学社	1979.9
5	『いるかの海あびどりの海』	田淵実夫 文/村上勉 絵	小峰書店	1980.10
6	『イルカと少年』	津田光郎 文・絵	新日本出版社	1985.6
7	『クジラとイルカ』	ターナー・オットレイ・ガイ 文/ジーン・カッセルズ 絵 きたむら まさお 訳	大日本絵画	1992.1
8	『イルカ』	ナディヌ・ソーニエ 文/マルセル・ジュネステ 絵 豊水順子 訳	大日本図書	1992.2
9	『イルカとおどった夜』	F・ディサイクス 文/D・ディサイクス 絵/たかはしけいすけ 訳	セーラー出版	1992.7
10	『てのなかのちきゅう』	マイケル・フォアマン作/原由子 訳 ※環境問題を告発。イルカはごく一部に描かれているのみ	佑学社	1992.4
11	『のぶちゃんとイルカ』	かわしましゅうじ 作/ひらくみえこ 絵	川島学園あかいとり幼稚園	1993.3
12	『地球のこどもたちへ』	シム・シメル 絵と文/小梨 直 訳 ※環境問題を告発。イルカの登場は一部	小学館	1993.4
13	『イルカの星』	葉祥明 絵・文	佼成出版社	1996.9
14	『海の宝もの』	クリスチャン・R・ラッセン 絵と文/小梨直 訳	小学館	1997.4
15	『イルカの風』	村上康成 作	BL出版	1997.7
16	『ちいさなミリーとイルカ』	T・ステー文/M・ピオトロヴスカ 絵/やまのうちきよこ 訳	岩波書店	1997.11
17	『いるかのうみ』	菅 瞭三 作	福音館書店	1997.9

表 1

1996年に刊行された『イルカの星』は、現在に続くイルカブームと、激動の90年代における新時代（ニューエイジ）待望という、二つの流れの接点に位置する作品だと言えよう。

なお、本作品の巻末に掲載された解説で、葉は、「イルカと海のことを真剣に考えることで、私たちは人類の文明の光と陰、そして希望と絶望を、はっきり知ることができます」と語り、「私たちはもう、今までのようなイルカの心を無視した接し方ではなく、彼らの生き方から、私たちが失ってしまった自由な心、シンプルに前向きに生きる喜び、優しい思いやりを学びたいものです」と結んでいる。

つまり、イルカは「自由な心」で「シンプルに前向きに生き」、「優しい思いやり」を持った生き物だと捉えているのである。多くの人々がイルカに対して抱いているイメージも共通しているのではないだろうか。だが、近年の科学的研究によると、イルカといえども殺し合いをすることがあり、必ずしも「自由な心」で「シンプルに前向きに生き」、「優しい思いやり」を持っているとは言い切れないようである。¹⁰⁾

とはいえ、その高度な社会性を見れば、理想的な哺乳類と呼ばれることにも得心が行く。我々人間が

学ぶべき点も多々あろう。また、たとえ現実のイルカがどのような生物であろうとも、大切なことは、この作品には何が描かれているのか、ということである。

Ⅲ 作品の解釈と分析

(1) 作品の構造

興味深いことに、1996年9月に刊行された本作品『イルカの星』と、約半年後の1997年4月に刊行された、クリスチャン・R・ラッセンの『海の宝物』は、作品の構造がよく似ている。梗概を比較してみよう。（※絵本なので、すべてが文章で書かれているわけではない。論者が絵を読んで解釈した部分もある）

◇『イルカの星』

家族と水族館に来ていた少年がイルカからの呼びかけに気づく。返事をする、イルカは少年を誘い、時空を超えて海へと連れていく。深い海の中で、少年は生きていることを実感する。イルカは海の素晴らしさ、環境汚染による苦しみを伝え、本当に大切なものは何かを少年に考えさせる。そして、すべての生物、海、地球、宇宙は一体であることを伝える。「あいしなさい、じぶんじしんと すべての生き物を……」との声が聞こえ、いつしか少年とイルカは水族館に戻っていた。

◇『海の宝物』

少女、アテランタが海を見ていると、イルカが現れ海へと誘う。イルカの背びれに手を掛けると、少女は時空を超えて海の中にいた。イルカは彼女をメッセンジャーとして選んだことを明かし、海の中を案内しながら、命を奪う流し網漁の怖さ、深い海の底にある洞窟の素晴らしさ、地上に暮らす生き物も含めすべては海の宝であることを明かし、海の大切さ、生き物たちの大切さを人々に伝えてほしいと願う。気が付くと、少女は波打ち際に立っていた。「愛しているよ、アテランタ！」との言葉を残してイルカは消えていった。

似ている、というよりも、「子どもがイルカに誘われ、時空を超えて海の世界へ行き、そこで何らかのメッセージを受け取り、元の場所に帰還する」という筋書きは全く同じだし、すべてが一体であること、愛することの大切さを伝えているところも酷似している。

このように、時空を超えて別世界へ行くのはファンタジーの手法である。近代的なファンタジーは、[現実世界] ⇒ [通路] ⇒ [異界] ⇒ [通路] ⇒ [現実世界] という作品構造が特徴で、両作品の場合、[通路]が明確ではないが、行った先は普通の海ではなく、人間も息できる特殊な空間であり、明らかに[異界]である。人間と動物との交流を題材として何らかのメッセージを伝えようとするとき、このようなファンタジーの手法を取り入れるのはよくあることで、酷似していても不思議ではない。

なお、『海の宝物』は、異界への通路らしき部分に「まぶしい白い光」を設定するなど、スピリチュアルな匂いを感じさせるものの、環境問題の告発が主目的と考えられ、特別な精神性は読み取れない。実際、ラッセンが「ニューエイジ」の思想的影響を受けていたのかも不明である。

(2) 作品の解釈

本作品を概観すると、①「感性の重み」②「執着からの解放」③「祈りによる甦り」④「包括的宇宙観」の四つの価値を主な柱として構成されていると考えられる。ここでは、それら四つの観点を解釈のための手掛かりとして、本作品の主題を追っていくこととする。

①感性の重み

「ぼくを よんだのは きみ？」

そうだよ。きみは ぼくの こえが、まこえるんだね。

冒頭に「—イルカと海を愛する君に—」との献辞が記された後、作品は主人公の少年「ぼく」がイルカからの呼びかけに気付くことから始まる。[見開き1]では、1頭のイルカがこちらを見つめており、読者と目が合った状態で会話が始まる。

ぼくたちは、いつも きみたちに かたりかけて

いるんだけど、ぼくの こえを きいてくれる

にんげんは、とても すくないんだ。

イルカ達は、何かを伝えたくて人間に語りかけているのだが、それに気づく人間は少ないのだという。ここで注目したいのは、鉤括弧（「」）である。鉤括弧で示されているのは少年の言葉だけで、イルカの話は鉤括弧で括られていない。これは、少年の言葉は通常の音声による発話だが、イルカの話は物理的な現象ではなく、おそらくは少年の心に直接伝わる、思念による伝達であることを示しているのであろう。（※本稿では少年の言葉と混同しないように、イルカの話は斜体で示す。また、引用の際、作品通りの文字配置ができない場合には、「/」で改行位置を示す。）

イルカは、呼びかけに反応してくれた少年を海へ誘うのであるが、少年が海へ行くためにはイルカを「感じる」ことが必要だった。[見開き2]を見てみよう。

さあ、手を のばして ぼくの 目を見て。

そして、ぼくを—かんじて！

「かんじる、かんじる、きみを—かんじる！」

厚いアクリルガラスで隔てられたイルカを物理的に感じることは勿論不可能である。この「かんじる」も、イルカの思念、心を感じているのであろう。

なぜ、この少年にだけイルカの声が聞こえ、そして感じることができたのか、詳細は語られていない。だが、献辞に「イルカと海を愛する君に」とあるように、この少年は海が好きでイルカに並々ならぬ関心を寄せていたと考えられる。それは、水槽を見入る客たちが描かれた扉絵からも明らかである。この

少年だけ他の客から少し離れて一人でじっと見上げている。少年は、家族と会話も交わさず、感性を研ぎ澄まして夢中でイルカの姿を追い、イルカに思いを馳せていたのである。

海中を潜行する少年に対し、イルカは更に告げる。[見開き 7] を見てみよう。



画像 2 [見開き 7]

海では、いままで にぶっていた
すべての かんかくが よみがえる。
そして、その中で いちばん たいせつなのが、
じぶんが 生きている っていう かんかく なんだ。
「うん、わかる わかる ぼくは いま 生きている」

海では、鈍っていた感覚がよみがえるということであるが、ここで言う海とは、ユングが「深い水は無意識を表わして」¹¹⁾ いると語っているように、現実の海であるとともに、意識の深みをも意味しているのであろう。喧騒に満ちた世界から離れ、心を落ち着けて意識の深みに目を向けたとき、人は生きている感覚を取り戻すことができるというのである。

本作品は、語り手であるイルカが饒舌で、[見開き 9] 以降、最後の [見開き 18] まで、少年の言葉はない。そのため、少年が何を感じ、何を受け取ったのか判然としない。だが、イルカからの呼びかけを聞き、イルカの心を感じ、生きている実感を取り戻すという一連の交流を通して、少年は感じることの大切さ、感性の重みを実感したと考えられる。

②執着からの解放

海中の心地良さを感じている少年に、イルカは言う。

ここは、おもさのない せかい
上も 下も 右も 左も ない。
海は、うちゅうに ちかいんだ。
そう、それが じゅう っていうこと なんだ。

この〔見開き6〕では、自由になることの大切さを説いているのであるが、「おもさ」という言葉も象徴的である。これは、体の重さであると同時に、心の重さでもあろう。人は心の重荷を降ろすことによって、生きていることを実感し、自由になることができるのである。だが、その自由も、自分本位の欲が絡んだのでは害となる。〔見開き10〕でイルカは次のように語っている。

きこえるかい？ 海のなかまの くるしむ こえが。
にんげんは、いろいろな ものを すてたり
せんそうの ために じっけんを したりして 海を よごしてきた。
海を よごすって ことは、じぶんの ころを よごすってこと なんだ。

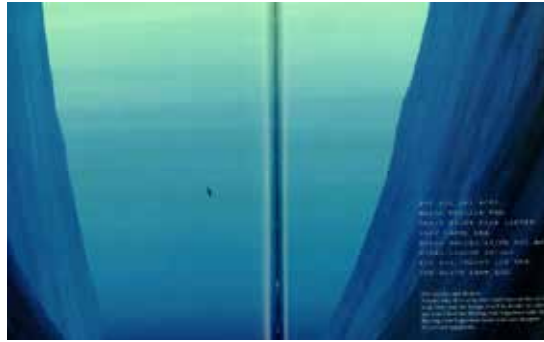
「海を よごすって ことは、じぶんの ころを よごすってこと」、これは当然の論理である。だが、現実にはむしろ逆で、「心が汚れているから海を汚す」のかもしれない。誰でも、好き好んで海を汚したくはないし、心が汚れたままでいたくはない。俗世間のしがらみや欲という汚れに縛られて行動し、結果的に汚してしまうのではなかろうか。

〔見開き11〕は、海溝であろうか、垂直に近い急峻な斜面に沿って、イルカと少年が潜行している。

もぐろう、ふかく。
じぶんの ころの おくふかく。
しずけさと やすらぎの 中で、
ほんとうの じぶんを 見つけるんだ。
そして、よろこびなさい、いま 生きている ことを。
もとめている ものは、じぶんの ころが、いちばん しっている。
うれしい ことも、ほんとうに やりたい ことも、
じぶんが いちばん しっている。
ころの こえに 耳を かたむけさえ すれば。

精神的な重荷を解き放って心の声に耳を傾けたとき、自分が一番やりたいことがわかるという。つまり、海を汚すような欲の絡んだ行動は、自分が本当にやりたいことではないのである。

〔見開き12〕で、イルカは少年を更なる深みへといざなう。



画像3 [見開き 12]

じぶんが しあわせになれば、みんなにも やさしくなり、よろこびを わけて あげたくなる
〈中略〉

それが、ほんとうの しあわせ なんだ。

執着を捨て去った結果、本当にやりたいことを見つけることができ、その喜びを人々と共有すること、つまり、本当の幸せを得ることができるのだという。

潜行を続けるイルカと少年は、遂に暗黒世界の中に輝く、眩い光明の領域に達する。[見開き 13] に描かれたその光明は、意識の底、心の根源であろうか。ここでイルカは少年に問いかける。

きみたちは、いままでに いったい なにを 手に 入れたの？
よけいな ものを 手ばなしなさい。

辛辣な言葉である。あなたは今までに、一体何を手に入れたのか。既成概念に縛られて得たものは、究極のところ、余計なものだったのではないのか。イルカは、そう問いかけてくる。圧倒されるような暗黒と崇高な光明の中にあっては、読者は素直にならざるを得ない。

では、「よけい」ではない、本当に必要なものとは何なのだろうか。イルカは続ける。

じゆうな ころろを とりもどして、はじめて
じぶんが なにを したいか、
なにを するべきかが わかる。

つまり、既成概念に基づく執着から離れたとき、人は自由を取り戻し、本当の自分を知ることができる。そのとき、自分にとって何が一番必要なのか、何を目指して生きるべきなのかが了解されるのであろう。

③祈りによる甦り

続く〔見開き14〕は、宇宙空間である。29頭のイルカと少年が地球を取り囲んでいる。一体何をしているのだろうか。



画像4〔見開き14〕

よごれた 海の くるしみを いやすため、
みんなで 力を あわせ、ひかりを おくろう。
あたたかい あいの ひかりを、すべての いのちの みなもとに。
そして いのろう、あたらしい いのちの よみがえりを……

〔見開き1〕で、イルカは、「ぼくたちは、もうすぐ いなくなっちゃ いけないんだ」と語っていた。なぜ、どこへ行くのか不明だったが、ここでその理由が明かされている。瀕死の地球を救うため、皆で力を合わせ、愛の光を送り、新しい命のよみがえりを祈っていたのである。とは言え、〔見開き14〕〔見開き15〕〔見開き16〕ともに、場所は宇宙空間である。当然、肉体を伴った移動ではなく、精神的な移動である。

イルカは、「よごれた 海の くるしみを いやすため、」と説明しているが、これも現実の海だけではなく、傷ついた心の苦しみを癒すためでもあろう。

その心の苦しみを癒す方法は、「すべての いのちの みなもと」に「あいの ひかり」を送ることだという。では、愛、光とは何であろうか。

一口に「愛」と言っても様々であろう。辞書によると、「①親兄弟のいつくしみ合う心。広く、人間や生物への思いやり。②(男女間の)相手を慕う情。恋。③かわいがること。大切にすること。」(広辞苑第七版)などがある。

だが、本作品でいう愛とは、これらのいずれでもないようである。なぜなら、すぐ後に、「いのろう、あたらしい いのちの よみがえりを」とあるように、「祈り」を伴う愛だからである。

「いつくしみ合う心」「相手を慕う情」「かわいがる、大切にすること」といった心情は尊いものではあるが、しばしば執着や欲望を伴う。当人はなかなか気づかないが、大切にしたいという気持ちや愛だと思っていたものが、実は相手あるいは対象物をずっと手元に置きたい、独占したいという激しい欲望や泥濘のような執着心に由来していることがしばしばあるのではなかろうか。

だが、祈りを伴う愛、例えば仏教やキリスト教で説く、「一切衆生の救済を目的とした慈悲」「人間をあまねく限りなく慈しむ神の愛」などは、深遠かつ晴れやかで清々しいものである。

ところで、「祈る」とは、「神仏の名を呼んだり言葉を捧げたりして、幸いを請い願う。祈願する」（広辞苑 第七版）ことであり、祈りにはその対象となる神仏がいるのが通例だが、イルカたちが一体誰に祈っているのか、ここでは明かされていない。ただ、宇宙空間でイルカと人間が共に祈るという絵からは、イルカたちの神、人間の神といったローカルな神仏をイメージすることは困難である。生物の垣根を超えた普遍的な神、例えば、宇宙の創造主に通じるような存在が強くイメージされる。

次に、「光」とは何であろうか。量子論によれば、光は光子と呼ばれる素粒子の流れであり、同時に波動でもあるという。愛の思念が素粒子の波動を発するかどうかは不明であるが、[見開き 14] では、祈るイルカたちから何らかの光や波動が出ている様子は描かれていない。目には見えない光となると、これも物理的には捉えにくい、例えば霊光やオーラのような、別次元の光だと考えられよう。

続く、「すべてのいのちのみなもとに」も、非常に重要な言葉である。これは、直接的には生命誕生の場所である海を指すと思われるが、その生命の根源、あるいは核となるのは何であろうか。

要素還元主義の立場に立てば、人間も含めたすべての生物は、脳や心臓をはじめとする諸器官の働きによって生きているのであり、「いのちのみなもと」など考察対象にすらならないであろう。だが一方で、生命の根源としての「魂」あるいは「霊魂」の存在は、洋の東西を問わず語られてきた。

臨床心理学者の河合隼雄は、その著書の中で、「ここで思い切って、人間存在を考えるうえにおいて、心と体と、それを超えその両者にかかわる第三領域の存在を仮定し、それによってこそ人間の本質が成立すると考えてみてはどうであろうか」と提案し、「第三領域の存在を仮定するほうが、はるかにすべてのことを理解しやすいと思っている」「私はそれを一応『たましい』と呼ぶことにした」と述べている。^(注12)

イルカたちの行動は、魂の働き、つまり高度な霊性にもとづく尊い行為だと言えよう。結局、ここでは、大いなる存在に向けて皆で祈り、海とそこに生息する生き物たちを救い、人間の魂をも復活させようとしていると解釈できるのである。

④包括的宇宙観

さて、本作品の終盤、[見開き 15] で、イルカは少年に重大なことを伝えている。



画像 5 [見開き 15]

ぼくたちの ころの 中には、うちゅうがある。
ころの 中の うちゅうと、そとの 大うちゅうは つづいている。
ぼくたちと、海と ちきゅうと うちゅうは、
じつは、おなじもの なんだ。

心の中に宇宙があると言われても了解しにくいだが、[見開き 15]には、星々が輝く宇宙空間を旅するイルカと少年が、[見開き 16]には、地球を間近に望む宇宙空間を飛翔するイルカと少年が描かれている。深く深く潜った意識の底にあったのは、地球も含めた宇宙空間だったのである。「ころの 中の うちゅうと、そとの 大うちゅうは つづいている」という言葉は、このことを言っているのであろう。

続く、「ぼくたちと、海と ちきゅうと うちゅうは、じつは、おなじもの なんだ。」は、更に踏み込んだ発言である。「つづいている」だけでなく、「おなじもの」つまり、一体だというのである。人は皆すべて、この宇宙と同根同体であり、意識も共有しているということなのであろう。

これは、宇宙を包括的に一つの生命体と捉え、星々や生物は相互に繋がっているとするホリスティックな考え方に通ずるものであるが、決して目新しいものではない。

古代インドで発達したウパニシャッド哲学では、宇宙を支配する原理である梵と、個々人の実態である我が一体であることを悟ることによって、本当の意味での自由を得るとされている。「梵我一如」として伝えられてきたこの思想は、悟りの境地に至る道として、日本人にも古くから親しまれている。

更に、[見開き 16]には、「この星は、ぼくたち イルカや クジラ、そして／すべての 生きもののために あるんだよ。」と記されている。曇りかけるような苦言はいささか耳障りに聞こえるかもしれないが、宇宙空間から地球を眺めつつ諭されれば、平和的な生き方の必要性に思い至り、素直に納得もできよう。本来なら、修行の結果として得られる境地であるが、ここでは絵と言葉のバランスによって読者が直感的に理解できるようになっているのである。

IV おわりに

本作品の大きな柱であると考えられる、①「感性の重み」②「執着からの解放」③「祈りによる甦り」④「包括的宇宙観」の4つの観点から作品を分析してきた。いずれも、発刊から四半世紀が過ぎた現代においても色褪せず、それどころかますます重要視されうる作品価値ではなからうか。

とりわけ、今日、人類の生存を脅かす最も重大な懸念は戦争であるが、その原因を突き詰めていくと、この4つの価値を見失ったことに行き着くのではなからうか。世界の人々が、狭い料簡に基づく執着を捨て去り、豊かな感受性を持ち、包括的な宇宙観に立って共に祈ることができれば、人類が抱える諸課題の多くは解消されるに違いない。

「スピリチュアル絵本」のコピー通り、これらの作品価値は、高度の精神性（Spirituality スピリチュアリティ）に由来すると考えられる。もはや、それは知識を集め適切に処理する能力としての「知恵」ではなく、真理を拓き真の平和をもたらす「智慧」であるといってよからう。

1990年代のスピリチュアル絵本を代表する『イルカの星』は、「智慧」を根本テーマとしており、現

代でも十分、その存在意義を有していると考えられるのである。

注

- 1) 島菌進 (2007) 『精神世界のゆくえ』 秋山書店、pp.50-51.
- 2) この時期、精神世界に関連した本がブームとなった。『精神世界の本』（平河出版社カタログ刊行委員会編、平河出版社、1981.8.8）には、実に 3000 冊もの精神世界関連の書物が紹介されている。
- 3) 例えば、「感じる絵本」や「かみさまに はじめて きがつく えほん」を標榜する至光社から刊行された、谷内こうたの諸作品等である。
- 4) 「HOT TALK 葉祥明 癒しを求める現代人は精神の成熟への準備段階にある」日本医療企画『Clinic bamboo 通巻 253 号』 2002.6, p.3.
- 5) 三浦正雄 (2018) 「葉祥明氏へのインタビュー（1）：霊性（スピリチュアリティ）をめぐって」『埼玉学園大学紀要・人間学部篇 18』 p.309.
- 6) 「YOH SHOMEI-NET SHOP.com (<https://www.yohshomei.com/exhibition/kikaku202308.html>) 2023.12.2 取得 .
- 7) 新江ノ島水族館 HP 「えのすいの歴史」 (<https://www.enosui.com/history.php?category=1>) 2023.12.2 取得 .
- 8) 島菌、前掲書、p.3.
- 9) 「ニューエイジ」という言葉の由来について。地球の自転の歳差運動により、春分点は約二万五千八百年ほどかけて黄道を一周している。観測によると、現在の春分点は魚座（双魚宮）の隅にあるが、ニューエイジを信奉する人々が依拠する西洋占星術によると、地球は二十世紀末頃から宝瓶宮（水瓶座）の波動を強く受け始めており、激動の末に博愛主義に基づく新しい時代（魚座の時代から宝瓶宮の新時代、ニューエイジ）が到来するという。
- 10) 例えば、村山司 (2015) 『イルカの不思議』（誠文堂新光社、p.66.）によると、イルカはいつも仲がいいとは限らず、急に相手を威嚇する（相手を噛む、尾で相手を打つ等）ことがあるし、種類の違うイルカを殺してしまうことさえあるという。また、クリスティーン・ジョンソン、ケニス・ノリス「イルカ社会のしくみと習性」青土社編集部編 (1997) 『クジラとイルカの心理学』（青土社、pp.180-185.）によると、例えば、飼育下における記録だが、バンドウイルカには、多くの場合、オスによって支配される序列社会が形成されており、ボスはとりわけ未成熟の雄に対して盛んに敵意を示す。ある群れの観察期間中に 16 回の交尾が目撃されたが、そのうち 14 回はボスの雄によって行われたという。
- 11) C.G. ユング、小川捷之訳 (1995) 『分析心理学』みすず書房、p.185.
- 12) 河合隼雄 (1996) 『子どもの本を読む』講談社、p.34.